

滋賀大学経済学部ワーキングペーパー第二〇三号（二〇一三年一〇月）

二代伊藤忠兵衛（精一）のイギリス滞在にかかる「本部旬報」記事

宇佐美 英機

二代伊藤忠兵衛(精一)のイギリス滞在にかかる「本部旬報」記事

宇佐美英機

ここに翻刻する資料は、明治四二年(一九〇九)五月から翌年九月の間、アメリカ・イギリスに滞在しながら商取引や学業に精励した二代伊藤忠兵衛(一八八六一―一九七三)の、イギリス滞在中における消息を記したものである。出典は、伊藤忠兵衛本部が発行していた『本部旬報』⁽¹⁾に掲載された、主に「当主の消息」欄である。

この「当主の消息」欄には、アメリカ滞在中の情報はまったく記されておらず、欧米滞在中の全容を把握できるものではない。しかし、これまで二代忠兵衛のこの時の欧米滞在中に関する情報は、『伊藤忠兵衛翁回想録』⁽²⁾や「私の履歴書」⁽³⁾などで本人が述べていること以外に拠るべきものがなかった。⁽⁴⁾「私の履歴書」のなかで彼は、「私の一生を支配したものの一つに、外国行、ことに英国留学がある(三六二頁)」と述べている。すなわち、このイギリスに滞在中の経験は、その後の経営者の立場にとっても、一個人にとっても、きわめて重要な意義があったと思われる。

しかも、前述の両書は、彼の晩年の記憶に基づいており、すべてが正確であるかどうかは定かではない。博覧強記であり、きわめて記憶力のある人物であったことは、行間から窺い知ることができるが、そのことを裏付けるためには、他の資料と付き合わせる必要があるだろう。⁽⁵⁾このことは、歴史学の基本的な作法でもある。

本稿は、この二代忠兵衛のイギリス滞在中の動向を記した「本部旬報」の記事は、まさに彼のイギリス滞在中と同時的に記録されていることに鑑み、上記の二書に記された記憶の正誤を正すためにも、また今後、二代忠兵衛による事業経営の実態を解明するうえでも貴重な資料と考えられるため、記事を翻刻し江湖に紹介するものである。

本文中には、イギリス・ドイツなどに滞在していた時に伊藤忠兵衛本部へ送った「通信」が引用されているが、現在、これら欧米から発信された通信・書簡は、一通も残されていない。それゆえ、原本の一字一句を正確に引用しているかどうかを確かめる術はない。⁽⁶⁾

それはともあれ、本資料中に登場する地名・人名などの解説・解題を付したならば、より理解を深めることができるのは言うまでもないが、かなりの紙幅を必要とするうえに、いまだ詳細な履歴が判明しない人名や判然としない事項も少なくないことから、今回は割愛することにした。

いずれにせよ、資料を通読すれば二三歳の若者がイギリスに滞在しつつ欧州大陸を巡りながら、次第に若き当主としての自我に目覚めていく様子を垣間見ることができ、それぞれの関心で一読いただけるならば幸いである。

注

(1) 『本部旬報』については、拙稿『伊藤『本部旬報』について』(滋賀大学経済学部附属史料館『研究紀要』第四六号、二〇一三年)を参照されたい。

- (2) 伊藤忠兵衛翁回想録編集事務局編『伊藤忠兵衛翁回想録』、伊藤忠商事株式会社、一九七四年。
- (3) 日本経済新聞社編『私の履歴書 経済人1』、日本経済新聞社、一九八〇年。
- (4) 上記の二冊の書物以外にも「西店ヲ語ル座談会」(丸紅飯田株式会社社史編纂室、一九六五年)なる小冊子がある。この座談会は、伊藤西店(ラシャ店)の歴史を振り返ったもので、一九六四年一〇月二八日に開催された。ここにも、二代伊藤忠兵衛の滞英中の行動について語った記事が収められている。他の資料には見られない情報が記されているが、非売品であるためこれまで知られてはいない。いずれ別の機会に改めて紹介したいと考えている。なお、この小冊子は滋賀大学経済学部附属史料館に寄託されている丸紅株式会社史資料に存在するが、当該史資料はまだ整理中のため一般公開に供することはできない。
- また、内田勝敏氏との対談でも留学について述べており、ここでの語りはイギリス留学の概要を知るには最も要を得たものといえる(「商社・紡績の二筋に生きる」(『別冊中央公論 経営問題 冬季号』、中央公論社、一九六五年)。一読されることを薦めるものである。
- (5) 二代忠兵衛のイギリス留学については、『伊藤忠商事100年』(伊藤忠商事株式会社、一九六九年)や『丸紅 前史』(丸紅株式会社、一九七七年)の両社史にも触れられているが、おそらくは本人からの聞き取りに拠ったのであろう。その内容は、回想録などで記されていることと一致する要約である。
- (6) 欧米から発信された書類が現存しないのは、おそらく忠兵衛が帰国の船上にあった明治四三年九月二三日の夜半、伊藤本店が全焼したからだと思われる。忠兵衛の書類は本部宛に送られてきたが、本部は伊藤本店内にあったことから、この時に一緒に罹災・焼失したのではないだろうか。

凡例

- 一、原本は謄写刷りであるため、不鮮明な文字が少なからずある。たとえば、文字が滲んでしまい「ン・シ・レ」のいずれなのか判読しがたいものがある。これらは、一部推測を交えながら翻刻した。
- 一、判読不能な文字は、■で示した。
- 一、原文では欧州の地名(カタカナ表記)のほとんどには傍線が付されているが、翻刻に際しては、これを割愛した。
- 一、原文に付されているルビは、そのまま翻刻した。
- 一、明らかな誤字・文意不明な箇所は、その字の右側に(ママ)と注記した。

【明治四二年（一九〇九）】

● 当主の消息 （「本部旬報」一号、九月一〇日）

当主は、七月二十日、紐育より瓜生中将と同船にて無事倫敦に着されし以来、益々健勝に渡らせられ、クラスゴーに於て西店取引先なるフィンンドレー氏の優遇を受け、蘇国の古色に接して、いたく英国人の奥ゆかしき保守に心を動され、低徊去るに忍びず、漸く此程倫敦へ帰られ、不日大陸へ旅行せらるゝ予定なり。而して当主書信中、特に英国にて感じたりとて申越されたる中に、英国人が如何なる人、如何なる物に対しても、「眞実の温情」を以て接するを見て深く感激せられ、是非広く店員諸君に告げ、其心掛ある様との懇切なる注意ありたり。心すべき事にこそ。

● 当主の消息 （「本部旬報」二二号、九月二〇日）

目下英京倫敦に御滞在中なる当主精一様には、其後益々御健勝に渡らせられ、毎日の日課として午前はタイムス、フィナンシャルニュース(中外商業流)を閲読せられ、午後は訪問若くは日本の書籍を耽読し、専ら御研究中にて、今月二十日頃より独乙の西君(西彦氏令息)を訪ね、約一ヶ月半を以て独乙の全部と仏の一部、瑞、奥、匈、白、和を御視察の上、余日あれば西、葡をも御巡遊、再び英京へ引返さる御予定の由。尚ほ斯く御多忙なるにも拘らず、店及店員に關しては深く御懸念遊され、每書信中或は營業の状態に就き種々御下問せられ、或は有益なる事項は詳細御報導下さるゝ等、實に感激措く能はざる処なり。然るに店員諸子、殊に幹部及び上級商務役諸氏の通信甚だ少なき由(店務多忙の為ならんも)に付、爾今余暇を見計らひ各其立場より見聞考慮したる事項は、続々通信せられたし。

○通達

各店幹部

(一) 在英主人精一様へ貸借対照表、毎月二回(本店ハ三回)、及其店ノ状況ヲ定メ御發送相成度候

幹部員又ハ仕入販売ノ諸氏ハ、各自己ノ立場ヨリ見聞考慮シルモノ、又ハ面白キ事ハ時々御発信相成度候

(二) 精一様ニハ当分左ノケ所ニ御寄宿中ニ候

c/o. Lady Wil Kinson

83. Portsdown Road. Maida Vale London

● 当主の消息 （「本部旬報」三号、九月三〇日）

洋行中の当主精一殿より九月九日御認め of 書信迄到着せり。書中既報の如く、愈々廿日頃より御出發。最初白、和を見て伯林へ赴かれ、西氏と会して共に独、奥、匈、瑞、(出來得れば西、葡)を巡り、帰途仏国を経て、十一月天長節前後に御帰英の予定にて、書信

は前号所載の倫敦の下宿へ宛て出状すべき旨附記せらる。

● 彙報 (「本部旬報」五号、一〇月二〇日)

○ 高木貞衛氏の帰朝

同氏は市内に於て広告取次業を以て有名なる萬年社の主人なるが、予て広告業及び之が経営法を視察の爲め洋行中の処、本月上旬帰朝され、去る十四日、当主精一殿の紹介状を持参、本部へ来訪せられたるが、同氏の談に依れば倫敦にて始めて精一殿に面接し、同地滞在中は各宿所を異にしたるも互に相往復し、相共に大使館に陸奥伯爵を訪問したる事もあり、或時は当主の案内にて市中の見物に出掛け、電車の停留場を間違ひ下車して途に迷ひたるが如き滑稽もありしとかにて、其後同氏帰朝の際は、当主は欧大陸旅行の途にありしも、折好く独乙にて面会し別れを告げられたる由なり。

尚、精一殿の彼地に於ける御近状を聞くに、英国にては紹介先の上流社会のみなるを以て、其交際広く非常に評判宜しき由にて、陸奥伯の如きは当主の偉大なる決心と研究心の強く、且つ意思の剛毅なるにはいたく賞讃せられしと。尚、独乙に於ては専ら織物に就て御研究中の由に見受けたるとの事なり。

因に高木氏は資性温厚にして、而かも真摯なる真に英国的の紳士なりと。

● 当主の消息 (「本部旬報」六号、一〇月三十一日)

当主精一殿には引続き西氏と共に欧大陸御巡遊中なるが、近着の絵葉書通信に依れば、本月上旬を以て独逸東部の視察を終へ、九日オーグスブルクより瑞西に入り、世界の公園を以て目せらるゝ瑞西の風光も、先急ぐ御旅行とて其真美を探ぐるの暇なく、殆んど素通りにて十一日午後一時三十分、瑞独の国境バーセルを越へて独逸に入り、彼の仏国より割譲の地たるアルサスローレンヌ洲のストラスブルクを通過せられ、十三日フランクフォルト御到着の報迄接手せり。

フランクフォルト御通信の一節に、

着早々、名譽領事を訪ね申候。当地は詩人ゲーテ、シルレル両星を出し、金傑ロスチャイルド、並に現首相ベートマン、ホルベック(ビュルト公の後任)を出したる地に有之候。

本日ゲーテの生家、初年時代育たれたる処を見物致し候。其時代の机、椅子、器具一切は勿論、台所道具等も整然と保存され居申候。軒続きがゲーテの遺物博覧館有之申候。肖像の彫刻、油絵は云ふ迄もなく、両親家族の油絵、原稿、其他恋人との往復手紙の微迄残り居申候。

西君はゲーテの事に関して取調られた事多く、豊富の物語を今パルマー公園の会堂でナイフ片手に聞きつゝあり。

ゲーテ(一七五〇年頃の出生)は拾七歳にしてライプツヒ(西君の処)に出で、大学の三年に入り再び帰て大に研究し、欧州を遍歴して名作を出したる由。晩年ワイマー聯邦(其当時は王国)に招聘されて大臣迄なつた傑物に候。(下略)

当地(ストラックブルク)で友人の医学士に健康診断を願つたら、不相変異状なしとの事也。

● 当主の消息 (「本部旬報」七号、十一月一〇日)

前報後引き続き独逸を御視察中にて「ライプチヒ通信」迄到着したるが、昨今気候変化の折柄、別に御異状もなく至極健全に御行動の由拝察せられ、伊藤家の為め、帝国実業界の為め益々自重あらん事を祈る。

● 当主の消息 (「本部旬報」八号、十一月二〇日)

当主は尚引続きて欧州大陸に巡遊にて、十月下旬一と先独逸伯林に安着。それよりハンブルグに向はせられたり。伯林よりこの地までは荒漠たる曠野を縫ふて繞れる汽車にて約四時間を要すといふ。而も其御通信の一節に曰く、「ハンブルグは流石に新興の土地にして到る処活気発動せるは、夜目にもそれと見受けた。流石の海港地なる丈け英語通じ居り、英国に類似の処が多い。英国へ帰った様な気で楽だ」と。日数が経つにつれて、更に／＼勝れ給へる当主の健康を祝す。

● 当主の消息 (「本部旬報」一〇号、十一月一〇日)

去月末、独逸より仏国巴里に向はれたる当主には、其後仏国を御巡遊せられ、十一月下旬、英京倫敦に帰られたり。「商港としてのハンブルグ」てふ題目の下に詳細なる通信を寄せられたり。此の有益にして趣味ある御觀察記は次号の旬報、若しくは他の適當なる方法を以て諸子に配付せんことを期す。

健康に佳ならざる北欧の風物も幸いに当主の尊体には障らざりしを喜び、更に殊に寒き英京の今冬中の御滞在の益々御健勝を祈る。

● 当主の消息 (「本部旬報」一二号、十二月二日)

幸にして当主精一殿は益々御壮健にて英京に御滞在中なりしが、去廿五日のクリスマスを終へ、伊太利の方面へ向け御出發せらるる筈にて、近着の書翰中に今後の予定を示されて、

「前略」一月十二日ロンドンを發し、十五日巴里通過、南独逸を縫ふて奥の主都ウインナに入り、セルヴィアの主府ベルグラドよりブルガリヤの主府ソツフィヤを経て、土耳其のコンスタンチノーブルへ達し、同所を見物して黒海を涉りてコンスタンザ(日本新聞にては度々コンスタとあり)に上陸して、ルーマニヤの主府ブカレストに入り、バルカンの最近勃興国を見て(實際勃興の機運に逢着)、例の近東問題として有名なるボスニヤ、ヘルツゴビナ兩國を左に取つて匈加利のブタペストに引返して、歩を南に採りて奥伊の海岸アドリアチック海に出で、トリエスト、ユーマ、ポーラ等の商・軍港を見て伊太利に入り、アドリヤチック海岸のヴェニスよりフロレンスに入り、ローマに達してネーブルスに辿り、引返してハゼノアに赴き(此処より松村少佐と離る)、ミラン地方の織物地を見てチュランより南仏に入り、有名なる盛り場のモンテガイロ小王国よりニースを見てツーロン軍港を

見物し、マルセイユよりピオー会社の船は式月廿五日投じて、再びネープルスへ寄港して、地震で有名なるメッシナ海峡を船より眺めて、月末にポートセットに上陸、汽車にてカイロに着し、ソレヨリ ナイル河筋を汽車にてルクソー、アスワンに埃及の古代の遺跡を探り、帰途はナイル河に通ふクック社の遊船に投じて下り、再びカイロよりアレキサンドラ等に約一週間足を止めて、ポートセットより乗船、伊太利ゼノアに着し、冬の瑞西の雄図を訪ねて巴里に帰り、三月下旬か四月上旬、英国に帰らんとするの予定に有之候(下略)。

○ 通達

主人精一様へ御出状ノ向ハ、一月二十五日迄伊太利国羅馬日本大使館ニ御滞在ニ付、右日限ハ全館へ宛テ差出サルベシ

但シ、各個人ノ賀状ハ御断リノ旨来信有之候ニ付、各店員中ヨリ代表者一名ヲ定メ出状セラレ度、此段為念申添候也

十二月三十一日

本部

【明治四十二年（一九一〇）】

● 当主の消息 （「本部旬報」一三三号、一月一〇日）

前報后未だ何等の御通信に接せざるも、御予定の如くんば明后十二日倫敦を御出発、仏国に渡らせられ、次いで南欧を視察せられたる後、阿弗利加の古跡をも探らるゝ筈也。到る処の風物は尊体の上にいやが上にも佳なるべく、切望の至に堪えず。旧臘末当主よりの御通信、独逸雑感は両三日中謄写に附し各店員へ配付すべし。

● 当主の近状 （「本部旬報」一五号、一月二一日）

予報の如く当主には、目下南欧地方御巡遊中なるが、最近ロンドン発の御通信を抜粋すれバ、

「其後クリスマス、正月の準備、之れとて旅の身の何の用もなさそうなものゝ、又何かと用でもなき様の事を仕出かして、ソレプレゼントをする、ソレ何と、世の中はどこに身を置ても人生の煩累から脱することは出来ないもの。ソレかあらぬか在留日本人間のクリスマス……クルシミマス……コマリマス……、なんて新熟語を作つて盛んに平素の決済に苦しむ連中もある。

何がさて諸事簡潔を旨とする西欧諸国の、物の贈答、虚礼の応酬などのあらざる筈を思つておつたのに、思ひきやこのクリスマスのみは何の因果か世の中の諸事万端の決済期、丁度日本の盆・お正月・祭りの一時に來た様なもの。このクリスマス政治、經濟、社会の全般に大影響あることは想外で、実は昨今好んで用事を作つて忙がしがつてる余の身は、此機会を利用して此の如き際の人心、社会の機微を穿つべく、否多少でもそれを窺知したので、度々世の尻馬に附いて幕の風にさ迷はされた次第である。併しながら其当日クリスマスそれは案外にも案外なもの、十二月二十五日の当日は堀越善十郎氏を見送るべく午前を費やし、午後は静かな曇りにて読書や閑談に時を費やし、只僅かな夜の正餐に例の七面鳥とロースビフなるクリスマス常礼の祝ひ物を食べて賑かに食事を終り、食後ホールに音楽を聞くかカルタ遊び位いが愉快の頂上。元來が宗教的の祭日とはいへ、最早今日基督教国民の欧米全土は國際的・国民的の大祝日にも拘らず、交通殆んど休止し、芝居其他の歡樂の僅かに場末かクリスマススのパンテマム（子供を樂しますものにて、他の説明は跡）の二三時芝居位が関の山であるから、勢ひ人心新たならんとするも能はざるといふ塩梅で、日本のクリスマスに代る新年の人民三日間業を休み、長幼となく貧富となく餅の雑煮にお祝ひし、七五三飾りして嬉々とし而樂しみ、呉越も手を携へて献酬する其当日の心根を見るに至つては、確かに国家をして平和に天下泰平の瑞相満ちて、長き人生を年毎に区画して肅正の気養はしむる永き習慣は、我大和民族の優美超越な国民性の然らしむる所かと、我大和民族の造つた瑞穂の国の難有さをしみ／＼と感じておる。即ちこれ等のいゝ習慣はいつ／＼までも保持し度く、又所謂紋日なる正月其他の祝日に於ける心身の休養日には、楽しんで乱れない程度に於て十分の愉快を尽されんことを右店員に祈る。

（中略）

クリスマス後の此の地は、お正月後の日本の様なもの。只ダンスだけは今後は季節で日

本人中にもなか／＼流行しておつて、若い娘相手に踊る連中も尠なくはない。余は優にやさしき技は真似られそうでもなく、時々ロータースケートングとて小車付きの靴で迂る面白い運動で、米国人の頗る軽快な技も流行つておるのにかぶれてやつておるが、これは中々運動になつて優美に欠け、常に時間に乏しい余等の身には、ダンスを避けて、常にこのスケータチングに出掛けておる。初めはよく迂つて転がったこともあるが、近頃は大分成功しかけて来た。ダンスは是非上流の交際には必要で、冬期の交際社会には知らねばならぬものだが、どうもこれを試むる勇氣がない、云々」と。

けふ此頃はブルガリア辺りか、それとも土府か黒海沿岸に愉快なる御旅行を続けらるゝことと信ず。

● 当主の消息 (「本部旬報」一六号、二月一〇日)

一月中旬英国出發、南欧漫遊の首途に就かせられたる当主には、ゆくりなくも仏国巴里の逆旅にて軽症に罹られ臥蓐中の由、在巴里菊池幽芳代筆來狀あり。即左に記さんに、

拜啓仕候。兼て申上候如く、松村海軍少佐と土耳古、伊太利等の旅行を共にするため、十二日当地にまゐり候処、兼て風邪なりしを無理し來れる故か、当地着と共に大いに發熱仕り、インフルエンザと相成、尚ホテルに臥蓐する次第と相成申候。

右の次第にて松村氏とはその行を共にすること能はず甚だ遺憾に候も、ヴェニスにて同氏と会合し、せめてイタリー丈は行を共にする心算に候。尚、小生の病氣御心配の事かと存じ候も、大久保医学士、小林力弥氏夫婦、その他諸氏の親切なる介抱を受け、全く快方に向ひ、此上は只疲労の恢復を得ば全愈なるまでの運びと相成候間、必ず御心配下さるまじく候。猶、来る二十二、三日ごろまで当地にあり、それより病後静養の爲めニスに赴き、来月五、六日ニス出發、伊太利に向ふ心算に有之、郵便物は悉皆ロンドンへ宛て御發送願度、埃及へも無論まゐらず候まゝ、万一埃及へ宛て御發送の郵便物あらば、倫敦へ轉送の事を先方へ通知被下度候。

取敢へず右御通知旁々申候。尚、小生の病氣決して御心配下されまじく候。

一月十八日

忠兵衛

右、菊池幽芳代筆

伊藤本部御中

「最早大丈夫に有之候間、決して御心配無之様願上候

精一」

(一の一句、当主の御自筆也)

● 当主の消息 (「本部旬報」一七号、二月二〇日)

既報の如く、当主には南欧巡遊の途、仏京巴里において病に罹られ、大久保医学士の診察を受けられたる処、發熱甚だしく病もかなり亢進せる由なりしも、幸に同学士の投薬効を奏したると、菊池幽芳氏、森山海軍大佐、鉄道院の正野学士等の厚情により、幸に英国人の看護婦を得られ、これ等の方々の方々の心尽しにより發病後一週間日位より、追々と食物を

撰取するまでに回復せられ、一月二十三日に到り同医学士の許可を得て同氏と同行、南仏の勝地モントレに転地せられたるが、同地に約二週間御静養の後、ヴェニスに於て松村少佐と相合して伊太利地方を旅行せらるゝ由。

我等店員一同は、風暖かに水清く白鷗飛ぶ、この南仏の風光の当主が健康に幸せんことを信じ、且つ祈ること切也。

○ 「通達」

明治四十三年正月元旦

英国倫敦

伊藤精一

伊藤本部

各店

各出張所 御中

謹賀新年

希望多き四十三年元旦午前一時、珍らしくも一天晴れ、十三夜の月清き朝、遙かに東天に向ふて本部各店各位の健康を祝し、其福寿を祈る。二に、小生幸に異境に在りて紀念すべき当り年の新春を迎へ、旧によりて益々頑健、邦家の為め我が一家の為め光輝赫々たる欧大陸の天地に介在して大に活躍せんことを期す。

ここに新春に際し祝詞を述べ、併せて自己の希望を表す。 謹言。

● 当主の御近状 (「本部旬報」一八号、二月二八日)

最近到着の御通信によれば、御病氣御全快せられたる当主には、二月六日朝十時五十分、南仏マントレ出發汽車により約三十分にして仏伊国境ベンチミグリアを通過せらるゝに際し、音に聞きし苛酷の税関も案外に寛大に済ませられ、到る処の自然の優雅にあこがれつゝ予定の六時二十分、伊国商港ゼノアに着。一時間余の休憩をとらせられ、七時廿分ゼノアを發し、其夜十時半、名高きミランのバラスホテルに到着せられたり。而して当主は、翌七日ミランを發しヴェニスに向て更に楽しき御旅行を続けらるゝ御予定なりと。

ゼノア、ミランは商工業の中心にて御調査の必要を認められなれば、帰英の途十分に視察を遂げ給ふべき筈也と。

● 当主の消息 (「本部旬報」一九号、三月一〇日)

予定の如く二月八日、ヴェニスに着。同地サンマルク寺院の建築の様式が希臘のクラシック式にビサンチン式を加味したるものを無限の趣味を以て見、バビロン(詩人)によりて歌はれたる有名の歎息の橋を見て共感を深くせられ、十日建築美術彫刻に就きては、ローマと相對峙するフロレンスに入られたりしが、十三日は松村少佐と共に午後此地を出で立ち、汽車によりて同夕刻ローマに着、ホテルマジスチックに投ぜられたり。其翌、伏見若宮、同妃両殿下の御入京を歓迎し、咫尺して御挨拶せらるゝ御光榮に接し給へりと。

建国三千年のこのローマの興亡の跡を探り、美術建築を見、風俗習慣を観察せられたる

後、十五日の一番列車にてネーブルスに向け御旅行の筈也。

● 当主の御近状 (「本部旬報」二〇号、三月二〇日)

予定の如く二月十五日朝、ローマ出發。其の正午ネーブルスに着せられ、二日御滞在の上、更に十七日同地發、ローマに引返され、直ちにゼノア着に向はれ、ゼノアを御視察の後、一日コモ湖水の秀麗を愛でさせられ、伊国の北部ミランに着せられたり。ミランを視察されたる上、仏国に向はる筈。

● 当主の御近状 (「本部旬報」二二号、三月三一日)

当主には、前報后仏国マントンを經由、翌日(森山海軍大佐と共に)ツーロン港に着せられたり。ツーロンは地中海のモルタ、ジブラルター等と相對峙する仏の要港にして、今は昔、西班牙對抗時代の策源地、英仏連合軍の黒海、魯の要害セバストポールを攻撃の際は、其本拠とし、一時ナポレオン時代、英の海軍によりて占領されたる古き歴史を有する軍港なるが、今は稍々衰微して古の面影を留めざるは惜しむべき事なり。因に我が松島、巖島の兩艦は、此軍港の建造に係るものなり。

● 当主の御消息 (「本部旬報」二二号、四月一〇日)

其後の御通信によれば、当主には仏国ツーロン軍港を視察せられたる後、岩倉氏(故宮相の令弟)及西村清氏と共に汽車により瑞西に入り、三月十八日瑞西ルツセルンに着。湖畔のホテルに雪景色を眺め、故国の風光を偲はれ低徊名残を惜んで翌日出發。積雪の山又山を廻りてインタラケンに到り、名物のライン酒に元気を付け、暫時間市内を視察せられたり。インタラケンには登山鉄道中腹まであれど、冬期は積雪の為め中止されたりと。而して此地方の民は剛健の氣自ら備り、而も性質敦厚にして四方の風光に感化さるゝか、自然に物とかなりとぞ。

インタラケンより首府ベルンを経、ゼネバ湖を横ぎりてローザンに着せられたり(三月二十一日)。此夕、愈瑞西の愛すべき風光に別れを告げ、仏京巴里に向はるゝ筈也。幸に日に増し御健勝に渡らるといふ。慶賀の至り也。

● 当主の御近状 (「本部旬報」二三号、四月二〇日)

当主には瑞西を経て三月二十三日、花の巴里に到着せられしが、翌日は菊池幽芳氏と共に郊外数十哩ヴェルサイユに散策せられたりとぞ。因に、この地には広き森林に彼のルイ十四世によりて建てられたる宮殿あり、其結構譬ふるにもなく、且つここは独乙帝フリードリッヒ一世によりて普仏戦争の凱旋式を挙げられたる歴史ある地なりといふ。

四月朔日には当主が御全快の祝宴を巴里のプルニエーに開き、御病中厚志を以て看護せられたる大久保医学士を始め、其他数氏を招待せられたりと。席上、紀念の枝折にとて諸氏の揮毫あり、其二、三を摘記せんに、

○あゝ楽しき今宵よ 菊池幽芳

○人の身の病は快癒し得べけれど 松村菊男

心の病はとみになほり難し、心すべきことにこそ

○ハバナ薫り電灯まばゆくブリユニエーの

サロンをせばみデーモンつどふ 大栄

(大栄は大久保医学士の雅号)

而して、当主には不日御帰英の筈。

● 当主御消息 (「本部旬報」二四号、四月三〇日)

最近の御通信によれば、当主には本月五日、岩倉男爵、松村海軍少佐等に見送られて巴里出発、帰英の途に就かれたりと。

● 当主の御消息 (「本部旬報」二五号、五月一〇日)

当主には、四月十一日よりブラッドフォード、マンチェスター、リバプール等の工業地、商港を視察せられつゝあるが、遠からずロンドンに御帰りの筈。因に四月十六日附御通信の一節を左に摘記すれば、

「横浜を辞して早や満一年、顧みて多少の感想なきに非ず。此の感想にして真の土産とすべきものならめ。兎に角此紀念すべき日を光輝ある大英国の工業の中心たる、又関係漸く多からんとするオーメン(前兆)たらずやと、本日同胞山辺君(大紡山辺丈夫氏の息)、中島大紡技師、川口高商教授、村山実業練習生等を招待し、心計りの盃をあげ、盛に談ず」と。

● 当主の御近状 (「本部旬報」二六号、五月二〇日)

当主には前号所載の如く、英内地御旅行中なるが、曩のロンドン御発途に際し御認め之書にして、マンチェスターにて御投函之分を得たり。今其一節を左に記さん。

「

日英博の一瞥

愈来月から始まる博覧会も、日本部は中々完成したとの事を大阪出品協会の進藤氏に聞きて、出発前の十一日シエフワード ブッシュの会場へ出掛けた。総事務局へ先づ第一にとアジソン ロードでチューブを下りて事務局に入れば、幸ひ旧知山脇春樹氏並びに友人の岸氏等が居られ、万事好都合で和田事務官長に面会してパッスを貰ふて出掛けた。

処が未だ溷沌たるもの、漱石先生の句を借れば、紛然、雑然、混然、騒然たるもの。併し出品物だけは全部来た様子で、館内は大小の荷物や棚でゴチャ返しであるが、其内に例によつて目に立つは、京都府の古風の建築、○高の奈良式のもの、三井、郵船の高襟つたもの。郵船は桜花で取巻き、今造花の取付け中で、其隣りが何県かの和風の坐敷で、建仁寺垣に花、恥かしき娘さんの取合せ。一寸日本村へ帰った様だ。矢張り日本の春は善いものである。大阪市は山中商会と山中清助氏の仏壇のサロンは、中々振ったもの。モスリン

組合と岡島のが一寸場所が宜しく立派らしい。

英国部は未だ殆んど手が附かず、早くて五月一杯だらうとの事。何時も律儀な国に不似合な事で後れるとは、矢張りこんなお祭り騒ぎは英人は下手だ。

外国のペンキ塗り鍍材の取付け等、ジョン ブールの英職工がノソノソやつてる中に半ズボンに鳥打やイナセな印半纏の兄哥がセッセとやつてるが、矢張り黄色いのは劣るし、トント兄哥連も見栄へがせぬ。

嘶は前後するが、大阪からの代表者進藤、藪、瀬戸氏等を知つてるので色々頼んだが、既に大通りは全部塞いで各府県の割当が済んで致し方がないが、何とか甘い処の陳列を願ふ積りだ。京都府の代表者にも会つて頼んで置いた。何れ帰京の上手づめに押し掛ける積りだ……云々」と。

日増しに健康勝れさせ給ふ当主の御祝福を喜び、且つ祈る事、切也。

● 当主の御近状 (「本部旬報」二七号、五月三二日)

最近の御通信に拠れば、五月七日には近藤廉平氏令息滋弥氏、安孫子農商務省練習生等と共にヨークシャイヤ洲首府ヨークに向はれたるが、此地は歴史としては非常に古く、英国のウエストミンスターの会堂もあり、すべて古いもの計りにて、家屋等も中世紀式の木造多く、古代の城壁残存し、げに支那の趣ありて人間もどことなくどんよりして親切気ありとなん。

而して翌八日、リーズに到られ、千住製絨所の石坂氏、安孫子練習生並びに後藤毛織物会社専務後藤恕作氏息續氏等の好意により、此地の商慣習、取引の狀態等に就き取調べられたる由なるが、元來英国毛織物の發達は、家内工業手芸より漸次發達したるものにて、機械等は誠に不完全極まるもの、皆技術計りにて、日本の千住等の如く、完全なる設備などとは見当らず、中野(尾州刈安賀)位の機械を備付くるものは、先づ以て上の部に属すと見るべきには、当主も予想外の感に打たれられしが如く、何れも皆技術にて精巧のものを製造し、主人自ら工務を執掌し、工費等も我日本の及ばざる程の低廉也との事にて、従て日本の毛織物業なるものも、将来大に發達の余地あれば、今後益深く専門的研究をこそ必要とすべきものなれとぞ。

● 当主の御近状 (「本部旬報」二八号、六月一〇日)

兼てイングランド内地御旅行中なりし当主には、去月中旬御帰倫せられたるが、五月二十一日(土曜)より左記へ御転居、近藤滋弥氏と御同宿の由。因に近藤氏は日本郵船会社々長近藤廉平氏の令息にして、滞英満九年、工科大学の業を卒へられ、至極温良の紳士なりとぞ。

○宿所 122. Fellows Road West Hamstead London N. W.

● 当主の御近状 (「本部旬報」二九号、六月二〇日)

日増し御壮健にて英京に御滞在中、近着御通信を摘記せんに、

「歴史国情に違つた処は、又妙なものに候。五月廿日はエドワード七世の葬儀ヒューネフラウクロセツシヨソ行行列であつた。通行の両側の人家は俄かに足場を作り、商店は商品を片付けて陳列棚シヨウクワイソドに段を作り、二階三階屋根までも開放してシートを作り初めた。夫れも其筈、最初一人の席が二、三ギニー(二、三十円)のものが、終には五、六ギニー迄も上騰して、遂にはそれさへもない。処によれば三十人詰の二階が三百ギニー(三千円)なんて、突飛な相場のものが新聞の広告にあつた。夫れさへも遂にはアップライ(申込)されたらしい。一國元首の葬式も御祭りだ。それも其筈、歐洲の元首八ヶ國に米仏の二前大統領、夫れに十数の國の親王に大英國の元勳功臣雲の如く参列するに於ては、実に曠世の見物だ。近い独仏よりは申すまでもなく、遠く米國三界からも見に来た物ずきものもある。僕も尻馬に乗つて三ギニーの席を買つて、朝の六時半から出掛けた。仰々しさ、物々しさ、口では言へぬ。何れ新聞に筆持つ人の文が掲げられるだらう。只驚くのは、虚無党の害を防ぐ為め無慮五万の探偵が世界各国から来たのは、事実である、云々」と。

● 当主の御近状 (「本部旬報」三〇号、六月三〇日)

当主には倫敦に御滞在中なるが、近着の御通信中、日英博所見、英先皇の死、綿業の中心、毛及毛織物並に其中心、取引の状態、新取引先に就て、及輸入織物の将来と・本・西店の取るべき態度等の各項に就き詳細なる報告を得たれば、謄写に附し各店へ配付したり。就て熟読せらるべし。

在倫敦当主より独逸雜觀先般着致候に付、謄写に附し御回送申上候

五月廿六日

本部

◎ 独逸雜觀(其一)

凡そ一國を評せんと欲せば、其の國語に通じ習慣になれ、更に其の國の歴史、政事、宗教、社界制度、地勢等に精通して後にあらざれば容易に口を開くべからず。若し半可通の視察をなして以て其の批評を加ふれば、啻に自己を誤るのみならず、其の周囲の者をも誤解の渦中に陥るとは、ブカデーの案内記にある文句に多少綾を加へたるものに有之候。實際批評家の態度は須く慎重なれ、精通して後にあらざれば口を開く勿れとは名言なるも、小生浅学寡少、其の言語は僅か数ヶ月間片手間にかぢりたるに過ぎず。歴史も知らねば何もしらする小生、一言半句の意志を発表する權利を有せざるも、今般の旅行中、英米独は見物の最主眼にて、少くも得る所尠からざるべく予期したるもの。費す所約一ヶ月十日間、旅程約三千五百哩、大都市に歩を止めたる十九ヶ所、工場の觀覽七ヶ所、博覽会の觀覽亦七ヶ所、博物館は卅ヶ所以上、之れに費す費用約一千元、努めて学者實際家に接し聞き得たる所尠からず。且独逸に関する著書は自ら充分に涉獵し得たと自信せるものに候。

昔より一寸の虫にも五分の魂との諺、浅学凡腦にも反映あり。費せし費用と労力とによりて日夜書き止めし日誌並視察録より抜粹し、且つ要点を列ねて親愛なる各位の前に呈し候。若し一顧の価値あらば小生の愉快とする所、且諸氏の学に足、且信なる意見あらば虚心批評を加へられ度、喜んで各位の反駁を受けたきものに候。尚、此の報告は眞の批評報

告に止めて、如何なる点が我国に採用し得るや否やは直に判断できもの。這は欧米先進国の各様各式を参酌して我国式に醇和するに非ざれば、其完と云ふべからず。小生は此所に只批評者の態度として論じ、敢て我国統ていどくてに適合するとの意見には無之を諒せられ度、且小生の常として物の照面をのみ報し、裏面の報告をせざるは小生の常癖に候が、物の視察には表裏両面の視察を要し、其の両面を見た上にて判断を施したるもの、且つや物の長所には必ず其の物の欠点たるは、物あれば影あるが如し。其心して御通読を願度候。叙するに先ち独逸の歴史を簡単に記し、以て独逸の如何なる政体なるかを脳裡に止め置かれん事を期す。

紀元第五世紀の初めローマ大帝国の政酣なりし頃、北方の蛮族ゲルマン種ハ北方スカンデナビアより海を越へて大陸に屯し、エルベ河（ハンブルグ附近）オーデル河（バルチック海に注ぐ）筋ニ移住して狩獵の傍耕作ニ従事したり。其性ハ慄悍にして進取の氣に富み、南下してライン河に出で、富国ローマの開化の余光を蒙れる南独（バイエルン）洲北方、即ミエン（ヘン辺）迄浸蔓し、属ローマの配下地（南欧）を犯して、優美なりしローマ人民に北方の蛮族として恐れしめたり。

再来地確確にして耕作に適せず、欧州文明の早かりし南邦よりは比較的等閑視され来りたり。乍併時代の推移と共に各州各市は日本の封建制度の如き形体を形作り、自彊自力内にあつて努めたり。殊に千四、五百年当時の自由都市（ニュールンベルグ（通信参照））の發達ハ、封建制度の自治体として特殊の發達を遂げたるなり。

斯くて隣国フランスはローマの文学美術は元より、統べてに顕著の進歩をなし、十七世紀の終より十八世紀の初期に至り、不世出の英雄ナポレオンの大兵を提げて雄図を逞ふるに及んでは、常に独乙国内は活劇の舞台として戦渦の巷となりしなり。

一世の英傑ナポレオンのウオータローの一戦地にまみれ、其の兩翼を殺がれし以来も十八世紀は、欧州各国互に相争奪し、世をあげて戦乱の時代と化し、独乙各聯邦は互に櫓を高くし、昨の和を結びし者も今日は殺害等背反する等、全く日本の戦国時代に彷彿たり。

此の時に当り普露西（現中央政府）の勃興漸く他に比し著しく、時の英帝フリードリッヒ大帝（現帝の三代前にしてポツタム宮より服せし人）は、彼の有名の鉄血宰相と相語りて、『血は最後の結合なり』との古諺と時代を觀破し、各聯邦を名将モルトケ將軍の下に統合して、時の大強国仏と兵を交へ、連戦連捷、遂に巴里城下の盟を得、アルサス、ロレーン二州を獲得し、其の余勢は巴里郊外仏帝の離宮ヴェルサレユ宮殿に於ける自己独逸帝國皇帝カイザーたるの戴冠式となり、空前の大賭博に贏ち得たる也。時は七十年前の一八三〇何年。

斯くて光輝赫々たる新帝國は、各聯邦より政事、外交、軍事の大權をあげて自己の掌中に収め、戦後ビ公の達眼と鉄腕とは此の間に処し、外にありては百方國威の發展を図り、内にあつては外聯邦の融和を図り、政事、軍事、産業發展の大政策を樹立し、国民は勤勉業に服し、代々の皇帝皆偉方にして困難なる此の國体を指導し、国民の向ふ処を示して、最近政事に軍事に産業に科学に、將た社界組織に異状の大發達を來し、今や統べてに於て大英國を凌がんとし、廿世紀の欧州の覇を掌握せんとする迄の強國となり来りし也。

尚、現帝ウイルヘルム二世陛下の才略偉大にして、各処々として發せざるなく、常に国内は元より世界的の紛議の的となるか、少くも多少の關係を有せられ、世人又カイゼルかと輦縮ひんじやくせしむるも、之れ國歩如斯困難の時代に世を享けられて、時代と共に進む。國是常に又他と交渉多く、且つ国民としての結合浅く、時に離背者を出さしむるの恐あるより、

『血は最後の結合なり』との古言を利用して、常に対外的に紛争を起さして国を上げて対外思想を高潮ならしめ、一国の結合を図るべく努めらるる其の現帝の苦慮や、我々の付度するも恐多き事ながら、其真情を権度(マツマ)すれば多少は同情も湧き来るなり。此処に於てか我人とも熟々思ふ、嗚呼我国のありがたさを。

千五百年の歴史を此処に付言して、愈々本題に入らむ。其の異例の發達を敢てしたる国家国民の發達の原素は抑も何？。先づ独逸に入りてより第一に目に入り、其の国を去る迄何処として感ぜざるなきは、

- 一、勤勉、節約、忍耐
- 二、尚武、軍事
- 三、秩序的、組織的
- 四、実用的科学、研究力
- 五、産業政策と社界政策

の五項にして、所有人の視察皆制一され居る也。

蓋し米国の如き化物的、英国仏国の如き歴史に変化多き国は、国民性相紛雜錯綜せるを以て、外見よりの判断往々矛盾を来すも、当国の如き人種を同ふし發達に一方針なり、歴史(發達の)比較的新しく、又制一的の国にあつては、比較的視察に誤なき為ならむ。

一、我故国江州中郡の發達は天恵に薄く、又誅求苛酷なりし故と。然り大に然り。独逸や其轍を追ひし而已。殊に最近數世紀、国はあげて戦乱の巷と化し、国民は艱苦に耐へ来りたるを以て、勤、儉、忍の三美德を兼備したるにて、亦も生の第一に置きたる次第なり。

先づ衣食住に就て見るに、同国は毛織産業の盛大なるによるも、立派な紳士の服尚綿入にして、芝居はフロックコート(英仏は必ずドレススコート、何んでもなき事乍ら独乙氣質が伺はれて妙)に絹の輸入は実に寥寥たるもの。下級の社界はツメ襟服に日本の如き散髪多し。

独乙料理は塩の辛くして、材料の悪しきにて有名なるもの。蓋し欧大陸中最劣等のものならんか。乍併材料には仏国の如き意想天外より来る底の如きものはなく実用品なり。

次に住は、国の新しきと學術的に出来居る丈に、流石は最新式のものにて利用多く、建築は便利にして経済的也。乍併材料は一時的にして、又室内裝飾に至りては殆んど見るべきなく、英国の重々敷ものゝ各種多くせると、仏の百花烟燻たるとを比較すれば、恰も冬の平野を歩むに似たり。

右三は生活の要素にて、亦独逸の何たるを知るを得ん。

会社の労働者は日曜なく(英米は皆休業)、十二時間の労働に服し、商店又日曜に門を閉ず。朝は七時半八時より夜は必ず七時迄(昼食時間二時間)執務する処、英国に比し非常の長時間也。

兎角独乙人に欧州支那人との称あるは、其の勤、儉、耐の三者を悪(?)しく比較したるものなり。要するに、国民は外鈍内鋭ゴツ／＼真一文字に進みつゝある也。

英国国民も確かに外鈍内鋭的の国民たるも、英国人は豁達剛毅に富み、独逸人は同じ剛毅でも寧ろ執拗で、何処かに物に拘泥し、錙銖の事迄争ふの相違あり。蓋し之れが最後の強味ならんか。

二、軍事的武力は平和の保証とは、独逸の利用して国力増進拡張に努めたる独得の妙

計なり。

最近一世紀間、剣に依りて得たる当国の所得や虧からず。普通戦後に於、大拡張を企てたる陸軍は、数に於て露国に数歩下る。其の軍隊の組織制度と軍人の精神と最新の武器とに於ては、確かに世界最強のもの、所謂平和の保証との名目の下に当国の得たる利益や虧からず。吾等の脳裡に未だ否か終生去らざる遼東還附問題然り。近くはバルカン問題のボスニア、ヘルニツエヴナ合併問題にも、確かに対露国境に動員をなし、敵を威嚇して即剣を最後の便りとして事を処する主義の甘さが、■一寸当国以外に出来ざる芸当なり。

元来、祖先以来勇猛慍悍にして武き事を好みたる故か、有名の決闘は此国学生の華として尚び、上流婦人最後の望は青年将校に配を得るにあり。

兎に角屯するに全国四十八ヶ州団を以てし、行くとして兵を見ざるなく、実に軍事国の反面は全国を蔽ふて、旅行者に深き感を与ふ。

また、最近海軍の大発達は恐るべきもの。英国民の戦慄恐愕は事実にして、既に日本にても十分の報道ある如く、ベレスフォード卿は宣言して曰く「一九一七年（八ヶ年後）にはドレッドノート型戦艦及びインフレツキシブル戦艦巡洋艦の数と制一式に於て、遙かに独逸の英国に優り、大英国の歴史に今日の如き恐るべき時代なし」と極言せしめたる当の独逸は、軍国として陸軍の外海軍にも数年後には世界最強のものとなり、例の武力は平和の保証を広義に利用して国力の伸長、培養に努めし如く、今後此の優越の海軍力を利用したる暁、正しく独逸国力の発展は測り知る可からず。

三、旅客先其の何れよりするも、国境一度越えて独領に入らんか、停車場は赤帽詰襟の駅長の下に各階級に適應して制服し、一規定の下に活動し、汽車は如何なる場合たりとも一分も後れず。野は等分に画然と区分され、森林は歩兵の如く制一し、各市の家屋は同じ階段に同じ塗色を施し、馬車自動車は必ず計哩器を備へて、走るにつれて自動的に賃金を計上し、道路は正列に通して両側制形の側樹を植へ、小学校生は男児は軍隊帽に半ツボン、女児は赤の大黒帽に黒の制服を着し、半裳を甲斐々々しくかゝげ、共にランドセルを負ひて列を正して登校し、其他数へ来らば数限りなく、兎に角一寸表面に現れたるもの然り。

内にあつて精細に見た時は、其所有凡てのものが秩序的に配列組織され居るは、実に驚くべく、此の組織力の強大なる丈に国家的觀念強く、欧州支那人との悪評あるにも不拘、何処迄も強味あるは此の故にて、此の一般的觀念、小にしては一家一店の経営に秩序ある發達を来し、大にしては国家大会社の経営に至大の便宜を与へ居るは、英国と比較して深く感したる処なり。

此の統一的組織は多少組織に階級を生じ、青雲の思望あるものも一階級に留めしむるの弊あり。政事に表れては官僚政治の弊（日本の国体にては官僚政治は時に必要なり）に陥る事あるも、独逸の強味は此の弊を良く知りて、其の間を甘く行くか確か■骨子にて、凡ての組織の長たるものか、此の間の消息を知ると否とが成否の岐るゝ処ならむ。

四、学問の淵源としての独逸は、蓋し諸氏の脳裡に深く刻まるゝ事ならん。特に最近に於ける科学の力の独逸の發達に資せしは、言を俟たず。

元来、教育の制度の完備せると社界の学術に対する智識の他に比して遙かに高きは、社界よく学術を咀嚼し、会社工場の学術利用の妙を得、学者又学問に仕ふると同時によく社界の向ふ処を察し、相適應して實際的に学問を活用する処事実を見て、従来の予想に倍す

るの思せり。

兎に角地は碻確に生活難を長く嘗めし時代より、無より有を生ずるは独逸の天職との觀念を与へたるか、希薄の鉄鉱より最良の鋼鉄を出して、近き英、瑞、諾、白と相对抗し、石炭坑の富坑に対する設備の妙は、常に当業者をして驚かしめ(日本の)、最近ライン河筋電気を応用して採取するアルミニウム、アルカリの精製、窒素肥料の分解事業、或は博士七百三十何名を常備とする某化学染料工場の如きは、必ず諸君の耳に古き事ならん。

五、産業政策と社会政策の二問題は、従来少からず趣に味を感じたるものにして、小生は研究者並に実行者の態度として英米兩國を視察し、少からず得る処あり。乍併英米の其れを見て少からず失望して独逸に來り、其の歴史、其の實際を見るに及んで、曩に失望したるに反し少からず得る処あり。彼我を参酌し考查し、故国の其れに考及して産業政策、社会政策を見る時は、趣味津津々として尽きず。且つや最近此の問題は世界各国の問題として為政者、立法家、実業家の苦む処、其を白面の一書生の臆面なく論じ、親愛なる諸氏の前に曝す。其の大胆と稚氣とを賞せられよ。

此処に産業政策と社会政策とは、厳正に區別すれば其の間区画あるべき。其影の形に伴ふ如きもの故、此処に合一して論ぜんとす。

乍併英米論を試みるとすれば、来るべき独逸の保護政策と重農主義、英国の自由貿易主義と否重農主義は、論者の根本の要素となるべきものなるが、這を論せば容易に本文に書き切れず。亦、世幾多の言論あれば、此処には只簡単に英米仏独との比較と独逸の長所を述べんとす。

(前述の産業社会両主義は、事実上必ず合一し居るにはあらず。多くの場合相衝突し居るも、国家の健全なる發達上より見れば、是非共適合せざる可からざるもの。即ち小生の述べたるは原則として適合規一すべきものなりとて、其原則を云ひたるものなれば、此の辺誤解なき様願上候)。

概言すれば米国は、産業政策(米國々家の主義にあらず、民間実業家の自己の主義也)は、社会政策並に国家の主義と相衝突を來し、今日其の圧迫の余波は社会の組織に変更を与へ、結果は国家に迄危機を蒙らしむ。即ち米国よりの通信、ハリマンとルーズヴェルトとの衝突や即最も顯著の引証にして、米国の滾々として尽きざる富は、貧富兩者をして声なからしめたるも、ル大統領とハリマン氏との衝突は、正しく産業政策と社会政策との衝突の反映なり(米國通信参照)。

英国に至りてや、国に永き秩序ある十九世紀の初期以来、蒸氣働力の実用を率先して文明機械を独專的に利用し來りたると、有名なる自由主義は極端の商工業偏重主義に傾きたる結果、国民の本位たる中等国民の階級を失し(即前世紀以前に米国の今日の如き(程度は低しと雖)産業社会政策の失態を來せしならん。乍併衝突の轟は低かりき)、極端の商工業偏重主義は勢ひ否重農主義となり、健全なる国民を失ひたる也。

斯く云へば、大英国民の特長たる剛健不撓の精神は、何処より生じ來り、且今日卓絶せるやと云ふに、其所が英国の大英国たる処にして、国民人種に先天的なると歴史習慣を重んずると、常に對外思潮の昂奮の国民思想を固めたと、英国の天候、其他の事情は大英国民をして常に穩健剛稜の氣を養はしめ、他の滔々浮薄の時潮に際して、尚よく巍然として超然卓越する処也。

其既に数十年前、社会の根本組織上、中等社会を失へる此の国家の勢として、資本家は

資本家、労働者は何代も其の父祖の業を垂くべき運命を負って生れ来り、五十年七十年コツ／＼として其の天職ツオケイシヨを甘んじて遂行せるなり。然らば其の結果や如何。富者は益々富み、労働者は次第に生活難に苦しみ、『貧しき劣れる者は亡ぶ』の諺に洩れず、身体上の素質迄劣り、今日既に其の傾向は益々甚しき也。

(然らば何故英国にはストライキの少きかとの不審あるも、元来實際を重んじ空想を避け、熱狂的ならざると、且立憲国の本家丈、言語の自由と自己の志想の発表自在なると、且資本家の労働者を神聖視し、其個性を尊重するに依る也)。

其結果や、労働者救済問題、養老金問題は数十年前より政府の事業として企てられたるなり。

其結果や、働かざる食ふを得るの途を得たるものは、次第に悪習慣になじみ、今日無働遊食者問題として社界の大問題となり、此種の遊食者、ロンドンにても實際通に満ち、初めての渡英者のロンドンにて、労働者とも就かず、乞食とも思はれざる無邪気なる浮浪の徒の多きに驚く処たり。

之れ英国の極端なる自由貿易、商工偏重主義より来れる悪結果にして、此の弊の蒙る処頗る多く、政治、財政、教育、軍事(陸軍の少きと海軍拡張に下院の反対多き、是れ)に及ぼしつゝあるなり。

以上、経過並に実状を約言すれば、既往産業政策は社会政策を無視し来り、今日社界組織に完を欠き、国家は社界の救済と社界の改造とに苦心しつゝある也。

仏国に至りては新に研究したるにあらざれども、元来最近国の歴史が変乱に富み、此所百幾年間に二度革命を企て、共和政体とし都度、永からずして君主政体と化し、三度の今日亦共和政体を採り居るも、人民中又々昔の君主政体を夢みる者多きが如く、国民は只頭のみ熱し、常識に薄く破壊的の国民なり。

最近家産分配習慣の悪しきより人口年々減少し、人民一般に貯蓄心多き故、国民個人の富としては増し、一般個人的に愉快の生活を遂ぐべき筈なるに、国家の根本確立せざると人民の理性に乏しく空想にのみ耽る結果は、物新しき社会主義ソシヤリズム、無政府主義アンナキズム、虚無主義ニヒリスツの横行甚しく、ストライキは会社工場のみならずして、最も神聖なるべき通信機関に迄及ぼし、一週間の郵便不通、十日間都市の暗黒等は数年来度々見る処なり。

即ち仏国は、国家社界政策の不確立と労働者の暴横の行為とは産業を脅迫し、其の極国家の存立を危ふするに至る。同じく産業政策と社会政策との衝突なるも、米国とは全然其趣を異にせり。

独逸 人民君子にあらざる以上、理想国家に対する能はざるや必せり。乍併国家の理想とする社会制度と産業政策を相適合して、比較的完全の域に達せるを独逸なりとす。

即ち立国の本義が農本主義にして、由来社会の組織が完全に、其国民分子は比較的素朴健実の精神に富み、十世紀来の封建的の政治と自由都市(誤解なき様願上候)の發達は、自治体の実と産業保護政策行はれて、産業随所に勃興し、殊に一八七九年以来の保護貿易主義は、産業上に多大の保護の実を挙げ(現時の日本の如く)、且つ自由都市以来のカルテルは米国のトラストに似たるも、暴横の行為なく共同生産、経営、販売等、其の調節を採る所、我か紡績聯合会に似たり。内は固くして外に当りたる結果と、最近化学工業品の發達と相俟つて非常に商業の發達を来し、勢労働者も利潤多きと階級制度の昔より厳肅なると服従心強く、且つ学者は皆穩健に社界学の研究をなして、其研究はよく政府為政者並に資

本家に咀嚼適用せられ、且つ米国の如く資労両者の間開放的ならず、多少高圧的威赫の手段を適切に応用せる事と(パレエルン聯邦の一州の如き、若し一工場にストライキ起れば、全工場主は直に工場を休み労働者を威赫す)、並に比較的工場組織は少にして資本家は個人多く、使用人の愛撫他より多き事等にして、全く社界政策上の理想とする処と国家の産業政策と相適応調節して、近き将来に両者の衝突見出し難きなり。要するに独逸は、青年団として上り坂の最中なり。

此の時代は統べてのものを善化する時なるを以て欠点は見出し難きも、此の調整は何日迄も続くべきや否やは、蓋し大に注目を要すべき問題なり。

談余岐に入るも、近來世界的の趨向を以て進みつゝ、日一日其勢増すは、空中飛行熱と社会主義との二とす。

前者は已に日本にも十二分の紹介あり、篤と諸氏之知悉せらるゝ如く、最早事実問題にて、仮す時間の問題のみ(完全の域に達する)。

第二社会主義問題は、米国の天恵多き金の轡に束縛されたる人間に不服の声なるも、前大統領氏並にタフト氏の移民防止策は、此の黄金国を永く封印して伝へたき望に外ならずして、僅かに社界主義者声なきのみ。仏国の同主義の毒する、既に前述の通り。物圧すれば反撥ありとかや。

英国の公開主義、更に物を圧せざる為か、將た社界の輿論の向ふ所、直に政治上に表はるゝ為か、從來(数十年来)極端に物の衝突なかりしも、最近に於ける対独軍備問題、自由平保護乎の大主義の論戦漸く盛になりて、其の影に付き纏ひて絶へず為政者を悩すは、社会問題也。

即ち有名なる本年の出納尚書ロイドジョージ氏の富豪對抗予想、自由党内閣アスクイス氏の苦戦、上院の大困戦の揚句停会、來年一月八日の解散(確定)、十五日の総選挙の如きは、實に一に起因する処、社界問題に外ならざる也。最も穩健にして社会主義比較的伝播せざると思ひし英国、亦爾り。何国も同じ社界主義病に感染し居り。只多少厚薄の差異あるのみ。独逸亦然り。

最近下院に於ける社会党は、有名なるベーマン(才氣汪溢、始終前名相ビュロー侯の政敵たりし人)の下にありて漸時勢力を増し、前宰相の一般の輿望ありしに不拘、議會を解散せずして膏血を絞りし予算を半葉放棄して、椅子をベートマンホラベック氏に譲りしは、蓋し一朝解散を行はんか、過半数はソーシャリストの手によりて得らるゝを憂へたる也。

乍併日本に於けるソーシャリストなる者は、只熱狂無謀半ば狂的の人物にして、又其主義は半ばニヒリスト(虚無主義)に近き行為を演出し、国体国家の何たるを知らざるものなるが、英独に於ける同主義は一部半狂的の人物も混入したるも、真面目に社界の進歩發達と共に(極)生じ来る自然の法則として、實に社界組織の研究実行者にして、政事家のみならず教育、宗教家は勿論、商工業家の真面目に研究し居るものなり。

此か此所に日本との相違ある所を明にし、日本の恐怖し居る如きものにあらざるを注意致置候

談例により多岐多様に分れしも、要するに独逸の發達の既往には如斯原因、如斯もの相関聯せる也

乍併長所の反面に潜み居るは、其物の欠点なり。強いて挙ぐれば第一に、余り保護主義に傾く反面、物価の騰貴、工費の上騰漸く甚しく、一部先進覚知者間には此の将来、此の

傾向が歩の大きさを以て増ざるやを憂ふる者あり。関税収入が直接中央政府の収入として多額のものにても歳出入の齟齬甚しき時^(マツ)今、政府の収入としても手加減を寛^(ヒ)ふすべからず。且つや老大退嬰せりと雖、大英国工業の富の資本と精良の機器と経験とを有するに對して、直に主義の変革は出来難きも、大独逸の政策の変革たる、蓋し中央当局者並に学者実業家の百年の計を今日に定めざるべからざる時ならん。

手段として保護の厚き官僚万能の当国にありては、時に政府信頼の觀念を馴^(な)れせざるやとの懸念あるも、小生の見し処には特に顕著の弊を見ず。商工業者の其の政府を利用するのみにて、其の力に倚る弊なきは、蓋し国民性の然らしむる処か。由来政府依頼心の多きは日本か。

乍併物の余り秩序的の結果は、階級の制余りに高く、下級の人民に青雲登竜の念薄きは(欧州大部)特殊の弊にて、重農主義は寧ろ地主保護制度と化し、小作民の生活難は往々にして一家をあげて米国に移住せしむる様の傾向漸く多し。

尚、軍事の發達は漸く外交、其他^(マツ)統べの点に傲慢の態度を現はし、近時英仏の聯合益々密に、三国同盟の伊は欸を露仏に通じ、露の最近独逸を敵視する甚しく、僅に利害を共にする澳のみは益交を厚ふし、一方日米間の隙を利用して盛に米国と温情を厚ふし居るは、吾人常に嫌厭たるもの。蓋し英国の某新聞カイゼル帝をナポレオンに擬し、百年前仏国が全欧を席卷したる如く、近時独逸は漸く欧州全土より敵視されつゝある也。

古来語あり、『戦はずして勝つは、善の善乗なり』と。世界の偉傑カイゼル三世及其国民、此間に処して果して如何の成策やある。

東洋の一書生、否、全世界の人士具瞻張目、大に其の手腕を見んとす。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ついで筆に委して長く相成候。一国を評するは数千の紙数猶足り不申候も、書く人も読む人も罹り易き神経衰弱に襲はれ可申、此辺にて擱筆仕候。

多少筆鋒政事方面に走り(余程謹みたれど)、吾人の研究の範圍を脱し、諸君の中には御忠義振苦々敷と思されやも難斗候も、広く深く(出来る丈)見て、最後の判読を下すが物の最良と存し候。尤も独逸の觀察は最初^{フリースタインプレジション}の觀察と最後の研究も余りの変り無之候も、吾人実業家を以て任とするもの、既往を知りて将来を量るは君子の遺訓にも叶ひ、最近發達の独逸を知り、其の因りて来る基を探り精神を汲めば、必ず読む諸君の中にも多少は肯綮に当る処あらん。

正月前忙しき時間を割愛して夜半一顧の榮を賜らば、小生の満足、之れに過ぎず。

事实上独逸を話さんとすれば、是非対英談を試みざるべからず。老大退嬰せりと雖、尚豐饒たるもの。蓋し面白き対照なるも、之れ少くも書くに数日を要するもの、機を見て初めて筆を染めん。

尚、此の視察によりて吾人は、独逸を見て何を得たるか、項を更めて初めん。

時に序し了りて見遣る彼方、寒鳥鳴いて過ぐる処ロンドンの空、亦終始天日を見ず。寒威漸く遅ふして、四圍亦寒く、三階の客舎に凍冷と戦つて秃筆を振ふ。

小生は生来ストーブは嫌也

十二月五日

認む

● 当主の御近状 (「本部旬報」三二号、七月一〇日)
最近のハガキ通信を抜粋せん、

「時は真に英国ゾーンになった。月の十五日は村君、西村君と打連れて此処劍橋大学を見物に來り申候。当地は牛津と並びて世界最古の大学にて、英国の碩儒、大政治家、総ては此二校より輩出したりとの事に候。劍橋大学は各分校にて組織せられ居り申候。其内のキングスカレーヂは建築最美にて、又程度高き様子に候。流石は古い事ずきな此国故、新らしき事を教ふる大学も建築、其他古く見るから歴史に富んだ処と見受られ候。校庭広く、幽邃な河辺、実に心地よく、ここで三、五年位勉強したき思致し候。云々……」

● 当主の御近状 (「本部旬報」三二号、七月二〇日)

前報后御通信に接せざるも、益々御健勝にて英京に御滞在中の筈なり。

○在英御当主よりの御通信に接し候間、謄写に附し御廻送申上候。

八月九日 本部

.....

七月十八日

ロンドン

精

本部御中
各店御中

日英独通信に関して各方面より大に御耳動され申候も、元來が日本で予想さるゝ程の大規模のもので無之、価値ある真面目なる批評を下せば、觀察筆調必ず其の総べてを毒するやも難斗、此の裏面の報通は筆進まず。

既に多少は故国にも洩れ聞れたる事も有之可申、且つ一般の事に関しては各内外の通信にて椽大は筆を揮つて通信有之様な。中には多少材料も小生等より貸したる事も有之候位にて、別段事新しく述るの要無之かと奉存候

只、此所に一言致度のは、名は日英博なるも英政府は別段深く携り不居ロンドン西南部のシェハード・ブッシュ土地興隆会社エスタブリッシュメントなる一会社カンパニーが、白ホワイトチ市なる博覧会場を作り、先年の英仏博の跡を其の時の日本大使小村伯に持掛け、日本政府を甘くも引張り込み、名を日英同盟に仮りて日英博とせしが、日本政府も外交上の色気にて次第／＼に深みへ這入りしこそおぞましき限りに候。

さて此の博覧会会社の社長(即ち英国側の委員長と称す)こそは、キラルフィーとて猶太人中の最切れもの、商売にかけては何の経験もなく、又外国人に対しては腹の底少々オヂケのある日本役人様、如何に此のキラルフィーの手玉にあげられずして何とせるぞ。

歩は一步一步深みへ墜り、引きぬく事も何も出来ず、当方の提出は何も通らず、先方は思がまゝのしたい仕法題メソッド。日本の名誉も日本の威厳も利益も何にもあらばこそ、自己の利益の前には殆んど大日本帝国も何もなく、英国の出品としては真に寥寥(ブラッセル市二比して英本国の出品、反つて半分もなし)。真の日本博覧会にて、而も広告の口上に、

Under the special auspicious of the Imperial Japanese Government (British の名なり)

「大日本帝国特別の支補の下に」なんて有之る文句は、日本政府、否、大日本帝国こそイ、面の皮に有之候。

元来日本にては博覧会は、勸業の意味に開かれ、又比較的に神聖視して、其の意味にも添ひ申候が、欧米等の開化せる(?)土地にては、或る一種の興行物にて、市民が遊樂の場所として不知不識の中に常識を与へ、一面品物の広告をなす様考へ居り申候。

此の意味よりして、此の博覧会を経営する上に如何にして客を引^{アトラクト}き、如何にして成功(金銭上の)するかを百も承知のキラルフィーが、日本政府に提出し強制したるは、張りボテ式の赤錫の鳥居・山門、やれ提灯、チョンマゲ式にて、偉大なる文明を吸集したる最新の利器を応用する大日本、先天的に高雅瀟洒を愛する山和民族の特長は、何処にか現れたる?。其の現れたるは俗想極まる支那とも南洋とも附かぬ現代の日本に見られぬもの。

物は目明き十人、盲目千人、特に前述する興行物として其の場当りの見地よりすれば、俗なもの程場当りの善きは当然、宜より高雅を愛し、真性物^{ソリッド}を愛する英国人(中流以上の)は、此の博覧会を見ていたく失望し、中には日本の其の真価までも彼等の懐き居る敬^{インスパクト}虔、より薄くせんとする次第。小生等も英国知人の御供にて数度案内説明せしが、其の都度痛烈なる質問に対し背に汗を覚へし事尠からざる程有之候。

要するに入場者は、英仏当時より非常に多しとし、当局者より切りに成功との数字を示されつゝあり。即ち博覧会なるものがインターテームメント(興行物)としてのものなれば、成功、成功、大成功なるが、日本臣民が考へ居る、其の臣民が汗血より補助したる百五十万円、其他公私の損失を打算して、夫れより得べく期待する産業の発展、貿易の増進、国威の宣揚、両国外交国交の漸重等、厳肅なる意味より見て、果して此の博覧会が成功なるや否や。大日本政府当局者、果して何の感かある……。

エライ又、議論めき(ツ)、ながく相成、申訳無之候)。

却説、本京店は出品■、さては平尾氏の尽力、小生も多少知人有之候故、出品の場所だけは多少適當の処を得にも(写真を取り度も手続きが面倒故、差し控へ候)、元来が品数も少々、品物が品物故、引き立つとは行き不申候。

本店のお染、吉野入うづら瓦斯縮、匹田麻の葉雨入り模様、なんてエライ、イナセな孝三氏の御骨折も、元来が毛唐には一観の価値もなく、八〇の岡中^②と何の撰む処もなく、殊に如何に物価の高い英国にても、一反拾五円の中形は先づ常識にて判断出来可申と奉存候。今更ながら小生が申上げし縮、寧波布、輸出タヲル等を輸出店の名にて出品相成れば、其効果と多少でも売れたものと奉存候。

京店の友仙、京店は固有の美術品との御自惚の由なるが、頓と其の割に感服致し居らず。友仙類は尺巾が悪く、一点も契約無之候。要するに京店は、あれ以上の努力の致し様も無之、当地にて何んとか処分可致考へ致居候。

日英博に関して此所に感ずべきは、ロンドンの植民商人間に日本商品を新しく取扱はんとする向有之らしく、其出品人を取調べ、直接出状せし処も有之候由に候が、此の内一つ猶太人にて、ライセンハイムなる人は生の在英を知り、取引したく申込候間、出掛けて折衝致し候。

商売は広く、又確實なる商人に候が只真のコンミッション・マーチャントにて、植民地の取引先と大阪と直接取引をなし、口銭を呉れとの事にて、殊にL/Cを發行不致候事故、小生は絶対にL/Cを要求致せし故、談不調に終り候が、中々信用有之、南洋・印度は元

より、南阿・南米・中米に取引致し居る商人に有之候。

例の匹田麻の葉模様の様な純日本向の商品を見てのみ取引を望むべく申込みたる事故、若し輸出品を出品すれば取引申込む先多く、大に研究の価になりしものと、今更なから物惜しく、愚にも附かぬ中形がうらめしき思致し候。

尚、ライセンハイム商店は大阪メリヤス商石井某のエゼントに有之候。如何様の振合にて商売致し居るや御取調べ被下度返事願度候(輸出店へ)。

二伸

先般願ひ候小生の帰朝に対する希望、正に拝受仕候。謹んで拝読仕候。各員意見のある所、赤心披瀝被下、小生の蒙を啓き被下、其全部ヒシ／＼小生の真隨に透徹仕候。諸氏の意見とせらるゝ所、小生の一年間半にて得し所と大した相違無之候。帰朝後諸氏に諮り実行し、以て諸氏の希望に添ひ可申相期し申候。尚、誓つて秘密は厳守可仕、不取敢一同へ返事まで如此に候。

尚、洩れた二、三の諸氏(二、三支配人、其他)必ず相聴し得らるゝ事と存じ候。

.....

七月二十日

ロンドン

精

本部御中

各店御中

昨年の七月廿日は、五日間の大西洋の航海から始めて大英国の地に足を印した日で、今日が早や其の一日である。誠に時日の過るのは早いものだ、速かなものだ。

滿一ヶ年何をしたか。多少旅行したと、本や雑誌か半囁りし得るの■と、西洋人の前へ出る押しが出来た位と、此の冬に一度生死の域に達した以外に、何をなし得た事なく、予期の大半にも腕を達する事の出来得なかつた事を思へば、真に忸怩たるを得ぬ次第である。

併し其の予期なるものは実に大様なもので、今より考ふれば多少夢想的な……何んでも洋行の前に懐いて居る……ものもあつたが、其^{サブスタンシャル}實際^{エッセンシャル}的な本質的な事には多少、否、深く判断の出来た事もある。

日本に居ては解決の出来ぬ様な事か悉く判断し得られた事もある。万事何処へ行つても形式こそ相違するが、帰着する事実問題に逢着し解決する場合には、洋の東西がない。現に先般願つた諸氏の希望内容を分解すれば、皆今私が考へて居る事と相違なく、其諸氏の志想の進歩した計画が真面目で遠大なるには敬服で、真に店員諸君皆々知己を得た様な感じがした。

只、其の問題……其の懸案を解決するのは何でも私の責任、私か全智全能の様な事を囑してあつた。又、私は出発前は其の解決者の様な気がしたが、其の解決は何んでもない。何でも支那の聖人が適才遠きに求めず近きにあり、とか申されたらしいが、真に然りで、此の進歩、変の世に処して御同様、我一家各店の処するの最後の精神は、足下に求められるのだ。

抑も形式上の事は、末の末だ。特に我一家各店の形式上の事は、日本より見ても、亦外国と対照して見ても、完全に近いものと自信をして居る。何処迄も運用は人、又其の人の

最後は精神である。

重ねて申すが、諸氏の希望せられた(私に)事は、又私も希望し実行せんとする所であったので、知己の感とは真にこの謂ひであるが、仮するに時と方法とを要する。御同様・なる一大帝国を現出するのは口にこそ易いが、実に実は大なる努力だ。御同様終生の大事業だ。知己は若いし考へは同じだ。それで出来上らずして何んと致さう。なんて英国式（ジョンブル）の悠長にかぶれた訳でないが、吾輩の一ケ年の英国観、何にか書かずばなるまい。

前提が例により方面違ひに走った。

何んでも仏蘭西の或る詩人が大倫敦記を書かんと企て(一寸断つて置くが、倫敦市は即ち或意味の大英国の総てを代表し、或る意味の世界の象現である)、やをら英仏海峡を涉つて滞在三日にして帰仏、筆を按じたが、何の深い印象もない。再び訪英して滞在三日目に材料を蒐めて帰仏し筆を執ったが、印象を纏めて志想を統一する事が出来ぬ。更に奮発して渡英三ケ年に亘り、博く漁り深く研究して帰つて卓に対した時、志想益々乱れ混沌たる英国観を条理正しく列ぬる事が如何にしても出来ず。終に／＼筆を投じた、と或る倫敦案内記にある。

此の案内記は、序文は記者が觀察の截利ならざるを弁解した訳でもなく、又僕が不勉強を此の一記者の弁の下に隠れ様なんて卑屈な考もない。実際、人口七百万史を按ずるに、紀元前何百年かのローマ侵入以来の世界の大都市習慣（メトロポリス）、歴史の上に立つて最近の文明の中心たる大魔物（モンスター）、實際総てが統一ある如くして雑然たり。条理立ちし如くにして矛盾せる、本人自身が大の矛盾屋なる僕すらも、此の矛盾には当てられホト／＼此の千万不可思議には閉口した。

實際国民情より分解すれば、一番古い事ずき。歴史を重んずる反対に一番新しき事を撰取して、今尚嚴として最文明国を以て自任し、人も亦許すのである。一番は個人主義で、公徳が発達し、国家を愛する觀念は形式こそ相違するが(一朝有事の時でなく総べてに現はれたる)日本より以上であるのが其の二。第三には、貴族を以て社界組織の要部とし、一番貴族を尊敬する国で、事実上社会主義的の設備と理想が現実され居る事。総てに冷靜な六ヶ敷国民でありながら、割合に温い事は其の四。其五に、自由の真意より打算せば、恐く米国以上に強い念慮を有する(個人主義より出た)国民が一番従順に服従し、大組織の統一に適する事。

マー書けば限りはないが、要するに各自の有する愛と義務とが表れて、国家を愛し、家を愛し、社会人類を愛し、各自の職務の前には実に神聖なる愛を以て義務を遂行する。如此大英国を作り、尚世の中に雄飛する次第である。

尚一つ、此の国民が歴史によりて養ひ、且つ先天的に味ふて得る大教訓は、最大の自由は最大の服従にあり、だ。之れこそ大きな団りの大英国並に植民地を今日の面倒な世界の中で勝手に引づり廻す事の出来るのは、要するに権利とか義務とかを云ひ廻し、相対抗して得た貴き教訓である。公徳など、申すは、此の教訓の末のみ。

顧みて我日本を見るに、最も英国に似て最も非て、其の非らずして真に近き点もある。即ち期せずして似、期せずして似せる点かあるのを諸君も発見されたるならん。

ツマリ形式の文明を撰取した我国民、近い処の御先進国と世人の申す国より善き処を撰取し実行して見たいものではないか。我伊藤家には殊に適切に撰取したい処もある。

僕一年間の英国の視察解決した処も、其の然らざるもある。一番目的にした国故、帰つ

た上はボツ／＼見た処を御相談して見たい。普通の英国並に欧州観光談を僕に望む人が沢山あったが、昨今此の程の出版物は汗牛充棟とか申す様な形式詞を使ひ度い位、かなり地位の高い人から「欧米発達の沿革を承り度い」なんてな事を望まれたが、こんな事は日本で充分知り得る処なので、僕が例の悪筆で諸君を煩す迄の事ではない。

実は英国視察記を書く筈なのが、追々沢山の借になつて、書けば例の冗長で記かない、其勇気がなく、此処に一寸機に触れて借金の申訳をした迄で、帰つた上で御望みとあらば膝つき合してなりと、又はコップの前で斜に構へて「エー諸君」なんて口調で大いに脂下つてもよい。筆では御免被る。

今朝からタイムスを読んで昨日のタイムスの日本号ジャパナンバの読み残りを謁し、平尾君の伊太利旅行の注意と旅プログラム程を相談して、電話を二つと手紙三本と例の希望書を十六本精談して、此の書面を書けば、午後二時半。之れから昼食してタイムスブッククラブへ出掛けよう。と筆の最後迄利用致候。

以上

● 当主の御近状 (「本部旬報」三三三号、七月三二日)

当主には七月七日、独乙より来訪の西彦太郎氏と共に英国海水浴場の先駆地たるブライトンへ赴かれ(ロンドンのヴィクトリア駅より約六十哩)たるが、翌日は西君を見送り旁オステンドに上陸、ブラッセルに世界博覧会を観覧せられ、独逸ケルンに入り、総て独乙式にて固められ、いづこにも努力の跡奮闘の力見え真に新興の氣溢れたる、ここ独国の敬すべく恐るべきあるものあるに感動せられ、翌十日には此独逸ロイド急行とてブレメンより伊太利ゼノア港行の大急行に搭じ、ライン河畔を縫ふて夕刻ウイルスバーデンに到着、ナッサホテルに投宿せられたり。因にこの地はカル、スバット、バーデンバーデン等と共に欧大陸の三大温泉地の一にして、四方山を以て繞らし、誠に幽邃の趣ありて冬夏共に好適の地なりといふ。

而して当主には、それより数日を出でずして帰英の途に就かるべき旨御通報ありたり。

猶、去ル廿四日着信、御当主の転居の報を得たり。即ち、

10 Queensborough Terrace Hyde Park W. London

但し、郵便宛先ハ、

Chubei Itoh Esq

c/o Kondo Esq N.Y.K 4. Lloyds Ave. London E.C.

● 当主の御近状 (「本部旬報」三三四号、七月三二日)

当主には去月上旬より中旬にかけて白独地方御旅行中の処、既に御帰英相成り、十八日附にて「日英博に対しての批評」、二十日附にて「英国観」の各一篇到着したるに付き、尽く謄写に附し各店へ送付したり。就て熟読せられたし。

○ 日英博受賞

去月十五日、日英博褒賞授与式举行せられ、当家出品に対し金牌授賞相成りたる旨、大

阪出品同盟協会より通知ありたり。

● 当主の御近状 (「本部旬報」三三三号、八月二〇日)

目下不相變御健康勝れ英京に御滞在中なるが、去月末バンクホリデーとて、英国商家一般の休日を利用して、近藤滋弥氏とロンドンを距る約百八十哩の西北バクストンなる地へ旅行せられたる由なるが、其御通信の詳細は次号に掲載すべし。

● 当主の御近状 (「本部旬報」三三六号、八月三一日)

前項記載の如く、九月三日ロンドン出帆の加茂丸に搭乗、帰朝の途に就かるゝ筈なれば、予定の如くんば、秋風清爽の頃、神戸埠頭に健かなる英姿を迎ふ事となるべし。

前号記載バクストン御旅行中の御通信を抜粋すれば、左の如し。

バンクホリデーとて、英国商家一般の休日を利用して近藤君と本日セントパーク駅よりミッドランド線にて約百八十哩、ロンドンより西北バクストンなる地に参り候。英国の中心にて割合に地静かに水清く、大に心に適ひ申候。ホテル ハイドロパシフィックといふ温泉やに投じ候が、滞留者割合に多く、夜も燕尾服に衣更してテーブルに附くといふ始末にて、吾々も急にゼントルマン化致し候。在留一年、漸くこんな場合に物なれ申候。此地方は峯の女王クイーンオブピークとて、北ウエルズに次ぎて山脈多く、割合に谷深く、自然水清くして気冷かに、兩三日の休暇を過ごすには誠に適當の処に有之候。工業とても石炭の採掘の外殆んど無之、外客の遊樂にて生活致居る丈に、ホテル、芝居、バブリックハウスの設備完なれど、人民の真面目にして物価の正確なるは、此国人のエライ処に有之候。

此地には案内記にはウオタリング(水多き場所)と有之しも、只山間潺々たる細流のあるのみ。河川に乏しき英国にては、コンナ場所がウオタリングプレスとでも申すべきか。清流に糸垂れて名物のツラウト釣りも面白きが、樹間影暗き所釣る所は、反て本能寺にある場所多し。

水に縁ある場所たる此地に湧き出づる鉱泉は、多少瘦せ薬にやあらん。近郷の肥えた伯父さん伯母さん達が、頻りに傾けておる。何処を見ても親しむべき人、善さそうな人達計り。吾々は、かくして三日間を平和に暮らし、明日又煙の中の人たらんとす、云々、と。

○ 通達

各店支配人

外一同

在欧当主には、九月三日倫敦出帆の加茂丸に御搭乗、帰朝の途に上らるゝ旨、本日電報着致し候に付てハ、同船は十月十三日香港着、同十九日神戸入港の予定に候へども、或は御都合にて香港に御上陸後、マニラへ向はれ同地方御視察相成べくやも計り難く候。何れ詳細を得て更めて御通牒可申上候也。

八月二十三日

本部

● 当主の御消息 (「本部旬報」三七号、九月一〇日)

前号所載の如く、当主には去る三日ロンドン出帆の加茂丸に御搭乗の筈なりしも、其後果して御出発相成りたるや心許なきまゝ、在ロンドン三井物産児玉氏へ問合せの電報を發したる処、七日左の如く着電。

「十日、マルセーユで乗る為め立った」と。

即ち、加茂丸は九月三日ロンドン出帆、十日マルセーユ着、同日同地出帆、九月二十九日コロombo着、十月六日シンガポール着、十月十二日香港着、十月十九日神戸入港の予定なり。御航海中は殊に御徒然なるよし。切に諸子の通信を御希望なれば、左の日取りによりドン／＼御通信せらるべし(正確に、迅速に)。

○九月二十二日頃迄發送の分は

Chubei Itoh Esq.

Passenger by N.Y.K. s/s "Kamo-Maru"

c/o Messrs Paterson Simon & Co. Singapore

○十月五日頃迄發送の分は

Chubei Itoh Esq.

Passenger by N.Y.K. s/s "Kamo-Maru"

c/o Nippon Yusen Kaisha Hongkong

○ 在英京平尾氏居所

平尾氏渡欧以来、杳として同氏よりの通信を得ざるが、此程当主よりの御通信により初めて同氏の宿所左記なる事を知るを得たり。

U. Hirao Esq.

c/o Mrs Thomas 35 heber Rd. Cricklewood London N.W.

● 当主の御近状 (「本部旬報」三八号、九月二〇日)

本月初めロンドン御出発前御發送の御通信を左に摘記せん。

交通機関の便利な事を今更ながら発見致し、昨今出発前誠に忙がわしく有之。礼廻り、買物、荷物の処理等、東奔か北走か方角も判らぬ程飛び廻り居候が、礼廻りにはフロックコート、シルクハットの衣冠束御々しき故、「穴むぐり」(地下線)もどもならず、不相得止自働車にて駆け廻り申候が、商業区域の軒別を初めとして、クリクルウッドの端よりケンジントン辺の反対の方角まで約二時間で二十五哩斗り歩き廻りたる仕末は、真に外国ならではの出来ぬ放れ業。其他地下線の利用も繁雑なる丈け、慣れゝば便利いや増し、用事の片づく事夥多しく、之れが本当に文明なるものゝ難有さかと被存、最後にここロンドン市に感謝仕候。

出発に際しては、何処も変らぬ人情、やれ送別会の心計りの酒汲み交し等との申込多き、其心尽しは難有きも、毎夜馳走攻めにては当方の身体が堪らず、止むを得ざる外は断り居

り候が、そこは又外国流にて無理に引き留めざるが外国流にや、此国人は申すまでも無く、在留の日本人も無理強ひせざるコソ誠に喜はしき思致候。

韓国の合併、今朝のタイムスで一覽仕り、所謂水到りて渠成るとは、真に此事かと被存候。思ひ返して日魯役以後、日本外交上の手際も中に甘きものと、此地にては日本の事が第三者の地位として観測出来申候。何としても結構な事。初秋の……(こ不明)は、善い影響を与ふる事と被存候。目出度き事の限りに候。両三日前、貴筆児玉氏宛のもの拝承仕候。(中略)

何か申上度き事有之候が、思ひ不湧。此処にて擱筆致候。之が英国からの最後の通信かも難計候。早々。

○当主は去る十七日スエズを出帆せる加茂丸のケビンに在まします筈なれば、けふ頃は紅海の酷熱に苦しまれつ、アビシニアの月を眺め、如何の感に打たれ給ふらん。

九月二十八日 コロンボ着 十月六日 シンガポール着

十月十二日 香港着 十月十九日 神戸入港の予定

● 当主の御消息 (「本部旬報」三九号、一〇月一五日)

日本郵船会社加茂丸に御乗船の当主には御予定の如く、十二日午後香港着、十三日午後四時香港発信して「今立つ」との電報着。而して神戸着八十八日午後、若くは十九日午前ならん。

「当主の帰朝」なる題目は次号の旬報を飾らん。

● 当主の御帰朝 (「本部旬報」四〇号、一〇月二〇日)

昨春四月十七日、横浜解纜の天洋丸に御搭乗、渡航せられたる御当主には、五月三日桑港に御上陸、夫れより北米各地を巡遊せられたる後、英京に赴かれ、其後歐洲諸国の商工業文物制度を視察調査、再び英京に引返されたるが、去月五日英京御出発国に出で、同月十日マルセイユ出帆の日本郵船会社加茂丸に御乗船、御航海恙あらせられず、十八日御帰着あらせられたり。

十月十七日午後五時四十八分、加茂丸は日向の南端都井岬を通過したりとの報、同夜更けて郵船会社神戸支店に着せり。直ちに本家控家を始めとし店及其関係者へ此旨打電し置きぬ。

明くれば九月十八日、天朗かに秋気清く澄み渡れり。此日一年有半余欧山米水に親まれたる御当主には、其御旅行を終えて御恙なく雄姿を神戸埠頭に現はされたるぞ。目出度き限りなる。

曩之、大阪よりは当日朝先発歓迎準備委員として西店川端支配人、輸出店藤野政次郎を神戸へ出向せしめ、次いで本部・各店よりの代表者各数名を遣はし、海岸通後藤旅館に待つ程に、本家御隠居様、控家御家様、同奥様を始めとし親戚並びに御当主の知人数多来神せらる。

午後四時といふに予て用意のランチに乗船したる此等驩迎者一同は、和田岬沖合に到り加茂丸を待つ。待つこと約一時間にして、水平線上纔かに一縷の黒煙を認め、何れもとりの噂を交ゆる裡に、船体次第に近く、今し彼方より現はれたる十五夜の月は煌々として、満船の迎へらるゝ人、迎ふる人、其月光を浴びて亦一段の清趣を添ふ。やがて船は檢疫を受くべく、この沖合に錨を投げぬ。愈近づくランチよりは、熾んに伊藤君万歳を絶叫し、当主の振り給へる白きハンカチ、加茂丸より之に和せる万歳の声天地を響かさんばかり。冴えたる月銀波に映じ、驩迎の人、驩迎の舩、いづれ詩たらざるなし。檢疫を終りてよりランチの出迎人一同加茂丸に移乗し、御当主に一々御挨拶を済まし、共に談笑の裡に神戸港に入り、七時上陸し、直ちにオリエンタルホテルに入り晚餐の饗応あり。新宅様の御挨拶、北川与平氏の祝詞(代表者)、御当主の答辞あり。各歎び尽し、九時半散会を告げ、御当主、御隠居様一行は午後十時〇二分、三の宮発列車にて梅田着、直ちに控家に入られたるが、御当主には、曩之控家に御待ち申受けたる各店幹部一同の御挨拶を受けさせられたる後、強めての御希望により本店に赴かれ、本店・輸出店々員一同の御挨拶御受けに相成りたる後、本店にて御就寝遊ばされたり。

御当主には久しき御航海の御疲労もなく、いと御元気に御見受け申したること目出度き限りにて、店員一同の深く喜び祝し奉る所なり。猶、当主神戸迄出迎人は左の如し。

伊藤栄治郎	田附政次郎	田附竹次郎	外海鍊二郎夫人
藤野宗治郎	出路久右衛門	山本富蔵	逸見省三
古川定次郎	羽田治平息	島瀬芳太郎	田附源兵衛
北川与平	渡謙三	不破栄二郎	む藤政七
藤野忠兵衛	織物新聞社村井氏	の諸氏	

外に

本家御隠居様、控家御家族様、同奥様を始めとし本部全員、本店三名、京店三名、糸店三名、西店二名、輸出店二名、東糸支店一名、外に荷造り方二名なりき。

● 当主の御旅行談 (「本部旬報」四一号、一一月一日)

十月二十五日、各店二等商務役以上の者を本部に集めて、当主欧米視察談催さる。形而上といはず形而下といはず、各種の方面に亘りて滔々数千言を費やさる。博聞強記にして御調査の精緻にして御觀察の非凡なる、多方面に涉りて趣味を有せらるること豊富なる、何れも感服しつ。御話につれて感興愈深く、各員みな身自ら其境に在るの思ひつ時の移るを知らざりき。さる人が、

「秋宵や 家の子召して 旅行談」と口ずさみしたり。穿ち得て妙なり。

御談話は四時に始まり十時過ぎ閉会。此間実に六時間なりき。

付記

本稿は、平成二五年度科学研究費(基盤研究(B)、課題番号24330119、「伊藤忠兵衛家同族による事業経営の研究―総合商社伊藤忠商事・丸紅成立前史の分析―」)、および財団法人伊藤忠兵衛基金の文化厚生事業助成金による成果の一部である。